

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370738

研究課題名(和文) 大学英語教育におけるスピーキングテストの比較：指導法及び学習者要因とのモデル構築

研究課題名(英文) An analysis of speaking assessment, teaching methods, and learner factors in the EFL university context

研究代表者

藤井 彰子 (Fujii, Akiko)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：60365517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は国際的に使用されているスピーキングテストが、日本の大学生の英語教育にどのように役に立つかについて明らかにすることを目的とした。数種類のスピーキングテストの比較検討を実施し、形式による影響は少ないことがわかった。一方、テストが学習意欲に与える影響が興味深かった。従って、スピーキングテスト2回とアンケートによる調査を7ヶ月に渡って実施した。テストが学習者のその後の学習意欲の維持や学習行動への意識を育てる効果があることがわかった。また、タスクを用いたウェブ会議のスピーキング練習を10週間実施したところ、スピーキングテストでは測定できない成果が情意面、コミュニケーションの意欲の面で見られた。

研究成果の概要(英文)：The current study focused on the role of speaking assessment in university level English language learning in Japan. Results indicated that both the TOEFL format and IELTS format both led to similar assessment of speaking proficiency. More interesting was the effect of speaking assessment on student motivation. Therefore, a follow-up study was conducted investigating the effect of two speaking assessments (ACTFL OPI) over a 7-month period. Results indicated that assessment helped to maintain motivation and also positively affected learners' goal-setting and study behavior. Finally, speaking assessment was not able to capture proficiency gains from a 10-week weekly task-based speaking practice using web conferencing, although analysis of learner interactions indicated positive change in willingness to communicate and use of learning opportunities.

研究分野：英語教育

キーワード：スピーキング 言語テスト モティベーション

1. 研究開始当初の背景

日本の大学生にとって海外留学や奨学金など公的な選抜や判断基準に用いられる TOEFL や IELTS のような強い影響力を持つテスト (high-stakes test) は大変な難関であり、将来を左右する 경우가少なくない。本研究で取り上げるスピーキング力 (oral proficiency) テストについては、近年においてそれぞれに改訂が重ねられ、さらに多様化していることが報告されている (Sato, 2013)。例えば、最新の TOEFL iBT のスピーキングテストでは大きな変革が見られ、文章を読み、短い講義を聞き、それらの内容を統合し、アウトプットとして発信することが要求される。一方、より日常生活の状況に近く、実施しやすい点から学習者がグループディスカッションを行う新しい形式のスピーキングテストの可能性を探る研究報告もある (例: Bonk & Ockey, 2003; Winke, 2013)。さらに、日本の言語教育においても CAN DO (できる) の形で表した到達目標がヨーロッパより導入され (投野, 2013)、何が「できるか」を基点に「自己評価」の流れが教育現場でも取り入れられてきている (Nagai & O'Dwyer, 2011)。影響力が強いテスト (high-stakes test) の妥当性及び評価基準の検証に多くの努力が注がれてきているなか、他方では問題点も指摘されている。Sato (2013) は 14 種類ものスピーキングテストを分析し、評価基準が狭い範囲の言語要素に限られていて、より広義のコミュニケーション能力を反映していないと批判している。しかし、学習成果 (習熟度) を測定するスピーキングテストとしての妥当性 (例: Watanabe, 2000) や実施における問題点など、日本の教育現場を対象とした研究例がまだ少ない。研究開始当初、日本の学習者にとって、それぞれのテストによる評価の意義や問題点、大学教育の学習内容との一致などを調査した研究が必要だという認識があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国際的に使用されている複数のスピーキングテストが、中級レベルの日本の大学生の英語コミュニケーション力習得の評価にどのように役に立つかについて理論的及び実証的に明らかにすることである。具体的には、(1) テストの種類によってスピーキング力評価にどのような差があるのか、(2) テストの種類による差は習熟度 (proficiency)、学習動機付け (motivation)、不安度 (anxiety)、コミュニケーション意欲 (willingness to communicate)、過去の学習環境、といった学習者要因とどのように関連しているのか、(3) テストの妥当性や実施可能性、問題点について学生や教員はどのように考えるか、(4) タスク中心指導法 (task-based language teaching) にもとづいた授業の学習成果の評価として妥当であるかという 4 つの問いの検証を目指した。

実際には、研究が段階的に進み、段階ごとに結果が得られた後、次のステップでの研究の問いが定められ、当初目指していた目的からは多少の軌道修正が行われた。

3. 研究の方法

スピーキングテストの比較検討 (H26 年度)

38 人の大学生を被験者 (学習者) とし、以下の 3 種類のスピーキングテスト及び評価方法を実施した: 1. TOEFL 型のスピーキングテスト (指示に従って回答を録音する)、2. IELTS 型のスピーキングテスト (1対1の面接) (録音及び録画)、3. CEFR にもとづいた自己評価 (紙に記入)。さらに、テストに関する学生の不安度やテストが与える影響について幅広く扱ったアンケートを実施した。これらの音声データ及び画像データに関して、テスト基準にもとづく評価を行い、テスト間の差異及びテストと学習者の関連についての分析を行った。

スピーキング練習とスピーキングテスト

(H27 年度)
学習者 12 人を対象に長期的なスピーキング力上達を測定する目的で TOEFL 型 (モノログ)、IELTS 型 (インタビュー形式) のスピーキングテストを 4 月、7 月、1 月の 3 回実施した。その間、学習者はタスクを用いたスピーキングの実践練習に取り組んだ。練習方法は週に 1 回のウェブ会議を利用した海外 (フィリピン) の講師とのタスクを用いたインタラクション。情意面への影響を調査するためのアンケート及びインタビュー調査も実施した。

スピーキングテストと学習意欲 (H28 年度)

特に IELTS 型 (インタビュー形式) のスピーキングテストと学習者の情意面への影響に着目し、学習者 86 人を対象に 7 ヶ月に渡る調査を行った。学習者を実験群と統制群とに分け、実験群の学習者はスピーキングテストを 6 月と 12 月に受け、スピーキングテストの前後及び間に自己評価、学習動機 (motivation)、学習目標、及び学習行動についてのアンケート調査に参加した。スピーキングテストは米国 ACTFL の OPI (Oral Proficiency Interview) のオンライン版を使用した。

4. 研究成果

スピーキングテストの比較検討 (H26 年度)

初年度 (H26 年度) に収集したデータの分析結果は主に H27 年度に学会発表 (Fujii, Watanabe-Kim & Iino 2015) 及び論文 (Fujii, Watanabe-Kim & Iino 2016) にまとめてある。分析結果としては、TOEFL 型、IELTS 型の 2 種類のスピーキングテストの結果にある程度の相関が見られた。アンケート結果からは、発話内容を考えること、語彙力、また TOEFL

型においてはリスニング力が学習者にとって、スピーキングテストを受ける際の課題として上がった。また、学習者にとっての問題点は英語に関する言語面での運用力だけではなく、「何を話したら良いのかわからない」というコミュニケーションの内容にも深く関わっていることが観察された。さらに、テストを受けることによって、学習者は自らのスピーキング力と向き合うこととなり、それをその後の動機付けにつなげる学習者、あるいは低い実力が負の力として働いてしまうケースが観察された

スピーキング練習とスピーキングテスト (H27年度)

H27年度のデータ収集の際には、タスクを用いたウェブ会議のスピーキング練習（フィリピン講師との対話）を10週間実施し、その成果を測定する目的でスピーキングテストを実施した。加えてスピーキング練習の情意面への影響を調査するためのアンケートやインタビューも行った。分析結果としては、スピーキングテストからはスピーキング力の上達のはっきりとは見られなかった。しかし、興味深い洞察がアンケート、インタビュー、そして練習中の発話の分析から得られ、全国英語教育学会（Fujii, Iino, Ohata, Inagaki, 2016）にて報告された。例えば、ウェブ会議に参加した学習者とのインタビュー調査において、学習者にとってウェブ会議が苦しい思いと達成感とが入り混じった複雑な学習体験となったことが報告された。

次に藤井・杉本・大畑・宮平（2017）（研究大会発表）では学習者の情意に影響した要因をより詳細に理解することを目的とした。二人の学習者に焦点をあて、2ヵ月半に渡っての講師とのインタラクションへの関わり方を分析し、積極性が見られる場面、コミュニケーションに障害のある場面を特定し、また、講師からの働きかけとの相互作用及び期間中の言動の変化を分析する。方法論としては、willingness to communicate の概念を用い、学習状況の様々な要因によって形成される概念として、学習者の言動に willingness to communicate の形跡を見出した。Cao(2014)の事例研究を参照する。

そして、さらに、RELC 2018 の Fujii, Iino, Miyahira (2018)（国際学会）では分析対象を学習者2人から8人へ分析対象を広げ、引き続き、Cao (2014)の枠組みを参照し、学習者とフィリピン人講師とのやりとりの中での学習者の Willingness to communicate を時間軸に投影して分析した。学習者間の個人差はあったものの、Willingness to communicate が期間中に高かった学生は会話の中での学習機会をより多く活用することができていた。また、講師や学習者同士の働きかけが Willingness to communicate を育む事例が観察された。

つまり、タスクを用いたウェブ会議のスピー

キング練習の成果はスピーキングテストの結果には反映されなかったが、willingness to communicate のような学習を促進する情意面の発達に作用した可能性があった。

スピーキングテストと学習意欲(H28年度)

H28年度にデータ収集を行った研究では、学習者を実験群と統制群に分け、実験の学習者には6月と12月にスピーキングテスト（ACTFL の OPIc）を実施し、学習者にテスト結果を報告する時に次のテストまでの目標設定なども設定させた。また、テスト前後の動機付けやテスト後の学習行動の記録も調査した。スピーキングテストが学習者の動機、学習意識と目標設定、そして学習行動に与える影響について検討した。

分析結果は稲垣・藤井(2017)（研究大会発表）による途中経過の発表が行われた。その後、データを量、質の面からより精度の高い分析に取り組み、量的分析からは、スピーキングテストを受けた実験群と受けていない統制群とでは、7ヶ月の間の自己評価や学習意欲の維持に差が見られた。つまり、スピーキングテストを受けた学習者に関しては、学習意欲の維持が見られた。一方、質的分析については学習者の目標設定や学習行動を調査した。スピーキングテストを経験し、目標設定がより具体化し、学習行動も変化した傾向が見られた。研究結果は The Japan Association for Language Teaching (JALT) International Conference 2017(全国語学教育学会)にて発表し、(Fujii & Inagaki, 2017)、特に質的分析の詳細は日本言語テスト学会にて発表し(Fujii, 2017)、*Educational Studies* にて研究論文として発表した(Fujii, 2018)。量、質の両面を統合した研究論文は現在執筆中であり、国際学会誌に投稿予定である。本研究結果は言語テストの教育的使用、あるいは学習意欲と目標設定、学習行動の関連を示唆するもので、第二言語教育の理論構築にも貢献する洞察が得られた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 12 件)

1. Iino, A., & Yabuta, Y. (2015). The effects of video SCMC on English proficiency, speaking proficiency, and willingness to communicate. In Helm, F., L. Bradley, M. Guarda, & S. Thouesny, *Proceedings of the 2015 EUROCALL Conference, Padova, Italy*, (pp.254-260).

2. Fujii, A. (2018). The role of speaking assessment in shaping EFL learners' subsequent learning goals. *Educational Studies*, 60, 61-72.

3. Fujii, A., Watanabe-Kim, I., & Iino, A. (2016). The use of oral proficiency tests in the Japanese EFL context: Learners' perceptions. *Seishin*

Studies, 126, 5-17.

4. Fujii, A., Ziegler, N., & Mackey, A. (2016). Learner-learner interaction and metacognitive instruction in the second language classroom. In Sato, M. & Ballinger, S. (Eds.) *Peer Interaction and Second Language Learning: Pedagogical Potential and Research Agenda* (pp.65-93). Amsterdam: John Benjamins.
5. Ohata, K. (2015). Learning to live with continuous emotional difficulties: Self-reflective accounts of 7 Japanese learners of English in the U.S. *International Technology, Education and Development Conference (INTED) 2015 Proceedings*, 260-269.
6. Ohata, K. (2016). Factors influencing learner self-confidence in a Japanese EAP program. *The Asian ESP Journal*, 12, 183-212.
7. Ohata, K. (2018). The impact of learner demotivation: Retrospective accounts of Japanese EFL learners (学習意欲減退の影響について：日本人英語学習者の回顧的分析から)『フェリス学院大学文学部紀要』第 53 号, pp. 1-21.
8. Ohata, K. (2018). Development of learner self-confidence in a Japanese EAP program. *Journal of Language Learner Development*, 1, 25-35
9. Sugimoto, J. & Uchida, Y. (2016). A variety of English accents used in teaching materials targeting Japanese learners, *Proceedings of ISAPh2016: Diversity in Applied Phonetics*, 85-89.
10. Sugimoto, J., & Uchida, Y. (2018). How pronunciation is taught in English textbooks published in Japan. *Seishin Studies*, 130, 4-35.
11. Uchida, Y. & Sugimoto, J. (2016). A survey of Japanese English teachers' attitudes towards pronunciation teaching and knowledge on phonetics: Confidence and teaching, *Proceedings of ISAPh2016: Diversity in Applied Phonetics*, 80-84.
12. Watanabe-Kim, Izumi. (2016). L2 learners' exposure to and production of academic vocabulary in Japanese higher education: A corpus-based study. *Sophia TESOL Forum*, 8, 65-78.

〔学会発表〕(計 件)

1. Iino, A. (2015, November). *Effects of videoconferencing on EFL speaking ability*. TESOL Ontario, Toronto, Canada.
2. Iino, A. (2016, May). *Effects of task based videoconferencing on speaking performance and overall proficiency*. CALICO (The Computer Assisted Language Instruction Consortium) Conference 2016, Michigan State University.
3. Iino, A. (2017, July). *Process and products of videoconferencing sessions between EFL Japanese learners and Filipino conversation partners*. AILA 2017: 18th World Congress of Applied Linguistics, Rio De Janeiro, Brazil.
4. Iino, A., Yabuta, Y., Fujii, A., & Nakamura Y.

(2015, August). *Effects of output-oriented instruction with video-conferencing on English proficiency and speaking ability*. Paper presented at the Japan Association of Language Education and Technology (LET) 55th Annual Conference, Osaka, Japan.

5. Iino, A., Yabuta, Y., Nakamura, Y. (2016). *Effects of task based videoconferencing on speaking performance and overall proficiency (quasi-experimental design)*. 23rd EUROCALL Conference, Pyrgos, Cyprus.
6. 稲垣善律・藤井彰子 (2017). 「スピーキングテストが学習者の動機づけ、自己評価、学習行動に与える影響」(「日本人大学生のスピーキング力指導：ウェブ会議及びスピーキングテストの効果」発表枠内) 2017 年度言語教育エキスポ 2017, 於早稲田大学.
7. Fujii, A., (2017, September). *The impact of performance-based assessment on learners' goals*. 21st Conference of the Japan Language Testing Association. University of Aizu, Japan.
8. Fujii, A., Iino, A., & Miyahira, D. (2018, March). *The role of willingness to communicate in task-based videoconference interactions*. 53rd RELC International Conference. Singapore.
9. Fujii, A., Iino, A., Ohata, K., & Inagaki, Y. (2016, August). *An exploratory study of the effects of video-conferencing on university students' English language learning*. Japan Society of English Language Education (JASELE) 42nd Annual Conference. Saitama, Japan.
10. Fujii, A., & Inagaki, Y. (2017, November). *Can speaking assessment enhance motivation?* Japan Association of Language Teachers (JALT) and 43rd Annual International Conference on Language Teaching and Learning. Tsukuba, Japan.
11. 藤井彰子・杉本淳子・大畑甲太・宮平大輔 (2017 年 3 月) 「ウェブ会議における学習者とフィリピン人講師のインタラクションの事例研究」(2「日本人大学生のスピーキング力指導：ウェブ会議及びスピーキングテストの効果」発表枠内) 言語教育エキスポ 2017. 早稲田大学.
12. 藤井彰子・渡邊(金)泉 (2017 年 3 月) 「スピーキングテストでの学習者の発話の比較検討：教員が結果を活かすためには」(2「日本人大学生のスピーキング力指導：ウェブ会議及びスピーキングテストの効果」発表枠内) 言語教育エキスポ 2017. 早稲田大学.
13. Fujii, A., Watanabe-Kim, I., & Iino, A. (2015, August). *The use of oral proficiency tests in the Japanese EFL context: Perceptions and problems*. Poster presented at The Japan Association of Language Education and Technology (LET) 55th Annual Conference, Osaka, Japan.
14. Ohata, K. & Christianson, M. (2016, November). Retrospective Accounts of Learner Demotivation. The Japan Association for

Language Teaching (JALT) International
Conference(全国語学教育学会)Nagoya, Japan.

〔図書〕(計 1 件)

『In My Opinion - 話して伸ばす 発信型英語演習』飯野厚、佐藤ヘザージョンソン、藤井彰子、藪田由己子、中村洋一、大畑甲太 共著 金星堂 東京 2018.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井彰子(FUJII, Akiko)
国際基督教大学 教養学部 准教授
研究者番号：60365517

(2) 研究分担者

杉本淳子(SUGIMOTO, Junko)
聖心女子大学 文学部 准教授
研究者番号：70407617

(3) 研究分担者

渡邊泉(金泉)(WATANABE-KIM, Izumi)
国際基督教大学 教養学部 講師
研究者番号：40365523

(4) 研究分担者

稲垣善律(INAGAKI, Yoshinori)
津田塾大学 学芸学部 准教授
研究者番号：50433909

(5) 研究分担者

大畑甲太(OHATA, Kota)
フェリス学院大学 文学部 教授

研究者番号：00407181

(2) 研究分担者

飯野厚(Iino, Atsushi)
法政大学 経済学部 教授
研究者番号：80442169